

小川未明文学館 館報

第十五号

vol.15



小川未明文学館

新潟県上越市本城町8-30(高田図書館内)

TEL 025-523-1108 3

FAX 025-523-1108 6

小川未明文学館 館報 第15号

2021年(令和3)5月31日発行(年刊)

目次

【寄稿】

小川 健一氏

「祖父と父の思い出」

2

【報告】

文学館1年の記録(2020年度)

・ 展覧会

・ 各種講座など

・ その他関連事業

・ 特別展

・ 特集展示

・ 文学館講座第1回

・ 文学館講座第2回

【小川未明文学賞】

【ボランティアネットワークだより】

「のぼら」 Vol.17

【文学館からのお知らせ】

20

18

17

15

14

11

8

7

4

4

祖父と父の思い出

小川 健一

(未明の次男哲郎の長男)



表題について書いて欲しいとの依頼があった時、祖父については六十年以上も前のことでもあるので、断片的な記憶を辿ってみることにした。

私が小学校にあがる前、町田に住んでいた頃、度々祖母から高円寺に遊びに来るようにとの連絡があったことが今でも何通か残されている葉書からわかる。

祖父についてかすかに覚えていることは、母に連れられて町田から祖父宅（旧宅）を訪ねた時のことである。家は中野駅に通ずる細い通りに面した路地奥にあり、引き戸の門を開けるとすぐに玄關があった。玄關奥の急な階段の上から祖父が「よく来た」と声をかけてくれた。

その後、我家が町田から三鷹市に引っ越した後には祖父宅が近くなったこともあり、学校が休みの日には一人で訪ねるようになった。小学二年の

夏休みの頃だったと思うが、祖父宅に泊まったことがある。居間の卓袱台や長火鉢を片付け床を敷いてくれた。照明を暗くした部屋で一人テレビを見たことがある。探偵番組であったが、今程テレビが普及していない時代であったため印象が深く、番組名が「日真名氏飛び出す」という犯罪ものであったことを覚えている。真夜中になるとテレビの怖い画像の記憶と静まり返った部屋に響く柱時計の針の音や時刻を鳴らすポーンという音でなかなか寝付けなかったことを思い出す。

たまに親族一同で集まって食事会を催すこともあり、祖父の好きな中野にある店から弁当を取り寄せ賑やかであったことが印象にある。アルコールが入ると父や弟たち兄弟間で飼っている動物自慢が始まり、犬が賢い、猫が可愛い、鳥が利口などと騒々しく言い争うこともあった。祖母は子供の頃からいつものことだったのでろう静かに聞いていた。岡上の伯母はどちらにも組せず、なだめ役を務めていた。

記憶にある最後の思い出は、私が中学二年の頃だったと思うが祖父宅に伺った時、祖父が家の近くを散歩するというのでエスコートするように誰かに言われた。祖父は着物にハンチングを被り、ステッキを持っていた。門を出ると直ぐに舗装された緩やかな坂道になっているため、足元が危ないの肩を貸そうとした時、蹴躓かれ起すのが大変だったことが思い出される。それ以来祖父が自宅の外に散歩に出掛けたという話は聞いていない。



未明から健一さん宛てのはがき
昭和27年（1952）8月29日

おはがきありがとうございます。たいそう、じがうまくなつて、おどろきました。けん一も、あけみも、げんきでなによりおじいさん、おばあさんは、よろこんでいます。すこしすましくなつて、わるいびょうきが、なくなつたら、あそびにくるよ。まっています。たまがわへいつて、おもしろかったですね。おとうさん、おかあさんに、よろしく。さようなら。

父の思い出について話そう。父は大正五年東京矢来町で生まれた。子供の時分から体が丈夫でなかつたそうである。

父が残した随筆を見ると、祖父が高円寺に引っ越してから、散歩好きな祖父の供をして、武蔵野の風景が残る近辺をよく散策し、自然に向き合う心構えや祖父の思想など多くの事柄について話してくれたと書いている。

昭和八年父が十七才の時、美術団体の公募展に入選したことを契機に画家としての道を歩み始めた。昭和十三年陸軍に招集されたが体を壊し暫くして除隊となった。その後、本格的に洋画を学

ぶために日本美術学校に入校した。

十九年に母と結婚した後、町田に疎開し、そこで終戦を迎えた。当地でおよそ十年過ごし、その間に長男・長女を授かった。

戦後間もなくして神田にある小学館に就職し、編集部において児童画の選定や出版物の挿絵の指導などを行っている。これらの仕事を通じ画家や詩人等多くの芸術家との出会いがあったと聞いている。また仕事の傍ら幾つかの美術団体の公募展に出品していたが、一陽会の創立の主旨に惹かれ、以降一陽展を軸に活動している。最初の出品の翌年には画壇への登竜門となる特待賞を受賞し、祖父が非常に喜んでくれたと父は語っている。その後、会員、委員へと推挙されていき、昭和六十三年に常任委員になってからは会の運営に携わっている。

一陽会の活動を開始する傍ら、昭和二十八年に三鷹市内の丘陵部に居を構え町田から引越した。当時一帯は武蔵野の面影を残す雑木林・松林や畑地が散在するのどかな土地であり、近くには井の頭池を水源とする神田川や玉川上水も流れ、自然豊かな環境であった。父もこの環境に満足していたようで、青年時代に祖父と散策していた風景を思いだしたのではないだろうか。

越してきた当初は主に休日に画を描いていたが、画業に専念するため会社を早期退職し、一日中キャンパスに向き合っていた。私が就職した後

の休日には、夕暮れ時から母の作ってくれた肴と一緒に晩酌することを楽しみにしていた。そのような折には、父が趣味で集めた壺や茶碗など骨董品の話や季節の自然について話をしてくれた。食事の支度をしている母も父と共通の趣味を持っているので、時には話の聞き役として話題に参加してくれた。父の傍らには、必ずといってよいほど猫たちが控えており、おかずのお裾分けを待っていた。今思うと父が一番寛いでいた時間だったのではないだろうか。父の思い出は数多くあるが、子供の頃、近くの高尾山や向ヶ丘遊園地に連れて行ってくれたこと、お絵描き教室を開いていたので一階のアトリエが子供たちの集会場のようになり父が大変だったこと、父の友人たちがよく訪れ応接間で笑い声が絶えず、母も加わっていたことなども記憶に残る思い出である。

父は「冬間近な海辺は清浄な大気を感じる。一番好むモチーフもこの時節にある」として取材へ出掛けることが多かった。

これらの取材を通じて、昭和五十年代からは「風の道シリーズ」と題し、百号を越す青色を基調とした自然画を連作で出展し続けた。「絵描きっていうのは、一作一作が勝負なんだから、出来る限りは大作を発表することが作家として大切だ」と言っていた。平成八年頃より体力が衰えはじめ、大きな画は描けなくなったが、体調の良いときにはキャンパスに向き合って筆を執っていた。亡くなる半年前からは自宅で療養していたが平成十二年の三月に八十四才の生涯を閉じた。



未明71歳の誕生日祝いに集まった家族
(昭和28年4月12日)

左上段から

岡上忠雄(鈴江の夫)、岡上鈴江(未明次女)、
英二(未明三男)、優(未明四男)、貞子(哲郎の妻)

左下段から

哲郎(未明次男)、健一さん、未明、明美さん
(哲郎長女)、キチ(未明妻)、三方子(英二の妻)、
英晴さん(英二長男)

◆文学館1年の記録◆

2020年度は、14459人の方に
ご来館いただきました。

*新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、4月19日から5月10日まで休館しました。

*災害救助法が適用されたほどの大雪により、1月10日から15日まで休館しました。



高田図書館（文学館のある建物）の
玄関への通路
左右は2m近くの雪の壁

【展覧会】

特別展を1回、特集展示を4回開催しました。

特別展

〈画家・古志野実が描いた 未明童話〉

〈会 期〉10月10日～11月29日
〈会 場〉文学館市民ギャラリー
〈来場者数〉3237人

子どもたちに未明童話に親しんでもらうため、画家の古志野実さんが描いた未明童話「殿さまの茶わん」「月とあざらし」「負傷した線路と月」の絵画を展示しました。

絵画はアニメーション用に制作されたもので、のちに絵本化もされています。（いずれも平成30年2月 架空社刊）

未明の1200編におよぶ童話の中でも著名で、今なお親しまれている3作品の絵画約60点を、絵とともに文章も掲示し、お話とともにご覧いただきました。

あわせて、さまざまな画家が描いた各時代の3作品の挿絵を、書籍や雑誌・絵本を展示して紹介しました。

来場者からは、「やさしいまなざしで描かれた作品が心に響いた」、「色彩がきれいで、動物・人・花・植物などが生き生きしていて感動した」、「作品ととても良い出会いができて、来てよかった。アニメーションも感動した」という感想が寄せられました。

また、関連イベントとして10月25日には、未明ボランティアネットワークの協力による特別展おはなし会を開催し、33

人の方からご参加いただきました。
（詳細は【報告】特別展8～10頁に掲載）



特別展 〈画家・古志野実が描いた未明童話〉

※4月に開催を予定していた特別展〈第28回小川未明文学賞受賞記念展〉は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止しました。

特集展示

これまで小川未明文学館では、未明に関する作品や書籍、関連資料など、さまざまな資料を収集してきました。これらの所蔵資料を活用した特集展示（テーマ展示）を定期的に開催することにより、小川未明の作品や業績、人となりについて紹介しています。

（詳細は【報告】特集展示11～13頁に掲載）

【各種講座など】

小川未明文学館こどもクラブフト体験

〈日 に ち〉 8月22日
〈会 場〉文学館「出会いのロビー」
〈参加者〉71人

子どもたちに未明童話や文学館に親しんでもらうため、こどもクラブフト体験を開催しました。

テーマを、発表から100年を迎えた未明童話「野ばら」、8月の未明童話と親しもう。配布作品だった「夏の日ざかり」とし、モビール、コースター、冊子の表紙作りを楽しんでもらいました。

参加者からは、「5歳と1歳の子が熱中して取り組んでいた。素材がたくさんあって楽しい」「また楽しい工作をした」といった声が聞かれました。



モビール作り

朗読研修会

〈日にち〉 10月29日・11月5日・

11月12日の全3回

〈会場〉 高田城址公園オーレン

プラザ研修室

高田図書館会議室

ミューゼ雪小町多目的室

〈参加者〉 14人

橋由貴氏（朗読療法士・ヴォイスアーティスト）を講師に、朗読研修会を開催しました。

新型コロナウイルス感染症予防対策として、定員を例年の半数とし、広い会場でマスクを着用しての講座となりました。

はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、発声練習の大切さを学び、「心に響く朗読をするには」という講義に耳を傾けました。次に発声練習や開口訓練を行い、その後、未明童話「王様の感心された話」（大正9年）、「山の上の木と雲の話」（大正11年）を題材にした実践的な朗読で、講師から個々に指導を受けました。また、講師の朗読を聴き、受講者の今後の朗読練習の参考にしました。

受講者からは、「朗読の技術面だけではなく、心構えなど基本的な事柄を教えてもらえてよかった」、「プロの朗読を聞いて勉強になった」といった感想が聞かれました。

また、受講者のうち3人の方が、未明ボランティアネットワークに加入しました。



朗読発表



講義の様子

童話創作講座

〈日にち〉 通信講座・11月22日・

11月29日の全3回

〈会場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 8人

佐々木赫子氏（児童文学作家）を講師に、短編童話の書き方を学びました。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため1回目を通信講座とし、受講者が創作した童話の講評を、講師から書面で行っていただきました。

2回目・3回目の講座では、アドバイスを受け手直した作品の講評をいただき、さらに、受講者同士でお互いの作品について意見を交換しあい、今後の創作の参考にしました。

受講者からは、「先生の講義や講評はおもしろく、ためになる」、「他の受講者の作品の意図や作成の苦労などを聞いていると、童話を書くことの難しさも楽しさも共有することができ、とてもうれしい」といった声が聞かれました。

受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや市立図書館で読むことができます。



講師の佐々木赫子氏



講評の様子

文学館講座

〔日にち〕 10月31日・11月23日

〔会場〕 高田城址公園オーレン
プラザ研修室

〔参加者〕 延べ54人

〔第1回 小笠裕二氏（上越教育大学副学長・小川未明文学館専門指導員）、第2回 森下成一氏（有限会社スタジオトゥインクル代表取締役）を講師に、未明や作品について学ぶ講座を開催しました。（詳細は【報告】文学館講座14～16頁に掲載）

文学館おはなし会

〔日 時〕 毎月第2・4日曜日午後2時～

〔会 場〕 文学館ビッグブックシアター

〔参加者〕 延べ184人

〔未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力により未明童話を中心としたおはなし会（朗読会）を17回開催しました。〕



文学館おはなし会

出張おはなし会

〔未明童話に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力により、市内の小学校に朗読ボランティアが出向いて、おはなし会を開催しました。〕

2020年度は、市内小学校8校（405人）を訪問しました。

子どもたちの感想

・ お話を聞いて、友情とか協力が大切ということ、未明さんは伝えたかったのではないかと思います。

・ 音楽と絵で、お話に引き込まれました。

・ 未明がどんな人だったか少しわかり、別のお話も読んでみたいと思いました。



出張おはなし会（10月26日 北諏訪小学校）

子どもプログラム 未明童話と親しもう

—子どもたちに届けたい未来のメッセージ—

〔未明童話といえば「赤い蠟燭と人魚」「月夜と眼鏡」などが有名ですが、このほかにも素晴らしい童話が数多くあります。これらを子どもたちに読んでもらうために、月替わりで未明童話1作品を冊子にして無償配布しました。配布作品は、幼児から小学校の低中学年向けの童話が中心です。参加者には「おはなしカード」を配布し、集めたシールの数に応じて、文学館オリジナルグッズをプレゼントしました。2020年度は、延べ564人に冊子を配布しました。配布した童話は、文学館ホームページでお読みいただけます。〕

〔配布童話〕

- ・ 4月「たのしいちようたち」
- 〔初出「コドモノクニ」昭和9年4月〕
- ・ 5月「マルはしあわせ」
- 〔初出「セウガク一年生」昭和14年5月〕
- ・ 6月「なつめの木であった話」
- 〔初出「コドモノクニ」昭和8年7月〕
- ・ 7月「年ちゃんとかぶと虫」
- 〔初出「カシコイ一年小学生」昭和9年9月〕
- ・ 8月「夏の日ざかり」
- 〔初出「コドモノクニ」昭和9年7月〕
- ・ 9月「おじさんのうち」
- 〔初出「こどもクラブ」昭和23年2月〕



おはなしカード

- ・ 10月「ねずみとねことこおろぎ」
- 〔初出「小学一年生」昭和26年11月〕
- ・ 11月「こがらしのふく晚」
- 〔初出「コドモノヒカリ」昭和12年11月〕
- ・ 12月「タマとウグイス」
- 〔初収録「コドモノクニ」昭和7年12月〕
- ・ 1月「みかんきんかん」
- 〔初出「コドモアサヒ」昭和8年11月〕
- ・ 2月「みけのこうがいやさん」
- 〔初出「コドモノヒカリ」昭和12年12月〕
- ・ 3月「窓の外へ春がきた」
- 〔初出「コドモノクニ」昭和11年3月〕

未明童話のぬり絵

文学館の「出会いのロビー」では、いつでも数種類の未明童話のぬり絵をご用意しています。小さなお子さんから、高校生・大人の方まで、大勢の方に楽しんでいただいています。ぬった絵はロビーの掲示板に展示しています。



ぬり絵「月とあざらし」



【その他関連事業】

小川未明連絡会議合同イベント

〈未明童話の世界を感じよう〉

〈日にち〉2021年2月28日

〈会場〉上越文化会館

「小川未明フェスティバル2021春編」（上越文化会館主催）の開催にあわせて、小川未明連絡会議構成団体による合同イベントを行いました。

当館では「出張小川未明文学館」として、未明の紹介パネルやフェスティバルのテーマである「山の上の木と雲の話」の解説パネルの展示、未明童話集や小川未明文学賞大賞作品の読書コーナーの開設を行いました。

また、小川未明研究会（小笠裕二氏主宰）によるTシャツやクリアファイルなどの未明オリジナルグッズの販売、高田文化協会による「山の上の木と雲の話」をテーマにした絵の展示がありました。

未明ボランティアネットワークは、「山の上の木と雲の話」のパネルシアターや未明童話の手作り小冊子の配布を行いました。



出張小川未明文学館（読書コーナー）



出張小川未明文学館（パネルコーナー）



未明ボランティアネットワーク
パネルシアター



高田文化協会
絵の展示

2020年度特別展

画家・古志野実が

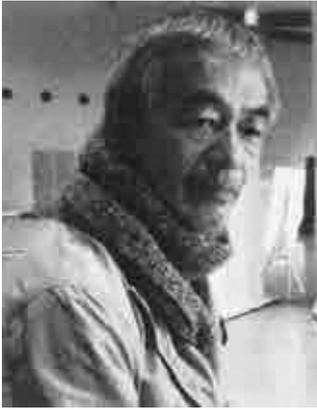
描いた未明童話

〈会期〉10月10日～11月29日
 〈会場〉文学館市民ギャラリー

東京都西東京市にあるアニメーション撮影をメインにした撮影会社・スタジオトウインクルが制作した、未明童話のアニメーションに使用された原画を展示しました。

描いたのは島根県生まれの画家・古志野実さんです。

古志野さんは昭和24年安来市に生まれ、同郷の画家・丸山勝三に師事します。20代で安来、松江で個展を開催しました。その後、インドや中国・西安にスケッチ旅行に出かけ、東京・原宿や銀座、住んでいた鳥取県米子市でも数回個展を開きましたが、平成26年に亡くなりました。



古志野 実さん

制作された未明童話のアニメーションは、「月とあざらし」（平成18年）、「負傷した線路と月」（平成22年）、「殿さまの茶わん」（平成28年）の3作品です。

古志野さんが童話を読みイメージをふくらませて、各地に取材して描いた絵を、スタジオトウインクルの代表である森下成一さんを始めにスタッフが、そのまま使用したり組み合わせたり、CGを使ったりしてアニメーション化し、DVDとして発表しました。その後、場面を厳選し、平成30年に架空社から絵本として刊行されています。

本展では、絵本にも使用された原画を中心に、約60点を展示しました。その他アニメーションにも使用された絵や、アニメーションにも使用されていないイメージ画が数多く存在します。中には機関車の吐く煙だけを何枚も、氷の上にたえずむあざらしを何枚も何枚も描いた絵がありました。

古志野さんの、力強く大胆なタッチの絵は、見る人を引き込む力があります。来場者からは、迫力のある絵だったという感想や、不安な気持ちがあるが温かみのあるすばらしい絵だったという声が寄せられました。



「月とあざらし」

大正14年4月、雑誌『愛の泉』に発表されました。

「北方の海は銀色に凍っていました。あざらしが、秋に姿の見えなくなった子供を探し、風に、月に、問いかけます。「私の子供がどこにいるか教えてください」いくら待っても風のたよりはなく、月はあざらしをなぐさめるため、南の方から小さな太鼓を持ってきてあげます。あざらしは太鼓を気に入ったようで、月は水が解けはじめた頃、あざらしの鳴らす太鼓の音を波の間から聞きました。」というお話です。





アニメーションの絵コンテ



古志野さんは、傍若無人に吹く暴風（あらし）、どんよりと曇った海、あざらしの体に降りかかる白雪を暗く冷たく描く一方で、南の方の野原で咲き乱れる花の中で踊る男女を情熱的に描きました。

■「負傷した線路と月」

大正14年10月、雑誌『赤い鳥』に発表されました。

ある日、汽車が重い荷物を積んで過ぎていったとき、レールに傷ができました。自分の不運を嘆いたレールは、雨の勧めで、月に自分を傷付けた機関車のことを告げます。月は不心得をさとしてやることを約束し、機関車を探しました。やっと見つけた機関車は、沈んで、停車場でじっとしていました。機関車も、レールとすれ合って車輪を傷付けていたのです。月は、機関車が積んでいた重い荷物が降ろされた港へ行きました。物思いに沈んでいた荷物は、月に、これからどこへやられるのかと心細さを語ります。月は、いったい誰が悪いのかと考えました。そこで今度は人間のようすを見に行くと、かわいらしい赤ん坊が、二階の窓から月を見て笑っているのが見えました。というお話です。

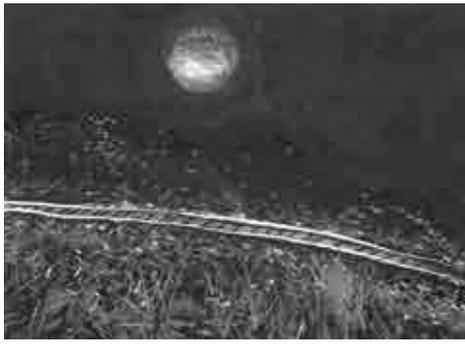
古志野さんはJRの車輛工場を見学して描いた絵について、「真剣に油まみれ、汗脂まみれで車輛修理工場で働く人が、この車輪をアニメーションで観て納得してくれるかと考えます」と、森下さんに書き送っています。



絵の裏面に、人物の配置についての考えや、制作の苦労などが書き記されており、試行錯誤の跡を感じることができます。



絵本には使用されませんが、客車の乗客の中に未明が描かれていた絵がありました。古志野さんの遊び心あふれる仕掛けに、子どもたちは夢中になって未明を探していました。



■「殿さまの茶わん」

大正10年1月、雑誌『婦人公論』に発表されました。

昔、ある国に有名な陶器師がいて、遠い他国にまで名が響いていました。ある日役人がやってきて、殿さまのための茶わんを焼くよう命じました。軽い、薄手の上等な茶わんができりましたが、殿さまは食事のたびに、手を焼くような熱さを我慢しなければなりません。山国を旅行したとき、泊まった百姓家に出された厚手の茶わんは、熱い汁でも手を焼くようなことはなく、殿さまは大変お喜びになりました。御殿に帰った殿さまは、有名な陶器師を呼び、親切心をもって茶わんを作るようさとしました。というお話です。



古志野さんは、陶器の絵を描くために、益子焼で有名な栃木県益子町を訪ねてスケッチをし、自宅のアトリエにあふれるほどのイメージ画を描きました。このアニメーションの制作途中で古志野さんは亡くなりましたが、スタジオトウインクルのスタッフの手により、作品は完成しました。



古志野さんの自宅のアトリエ



制作中の古志野さん

特集展示

特集展示1

〈新収蔵品展〉

― 絵雑誌と自筆原稿 ―

〈会 期〉 2020年

3月20日～7月9日

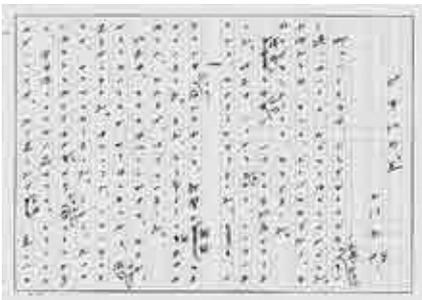
〈会 場〉 文学館常設展示場

小川未明文学館では、未明に関する資料の収集や調査を行い、それらを公開することにより未明の業績を広く紹介していきたいと考えています。平成17年の開館以来、収集してきた文学館所蔵資料は約3000点にのぼります。

本展では、令和元年度に新たに収集した資料の中から、未明童話「生メレタバカリノテフテフ」が掲載された絵雑誌『コドモノヒカリ』第1巻第3号（昭和12年）や、未明童話の代表作の一つである「眠い町」の初出誌、『日本少年』第9巻第6号（大正3年）を紹介しました。

また、先年小川家からご寄贈いただいた数十点におよぶ自筆原稿の中から、未公開の「ひすいの玉」（昭和24年発表）、「ごくろの実」（昭和28年発表）を展示しました。

かわいらしい挿絵や、自筆原稿の未明の特色のある筆跡、推敲の跡などをご覧いただきました。



「ひすいの玉」自筆原稿



「眠い町」初出誌



展示の様子

特集展示2

〈「野ばら」の100年〉

〈会 期〉 7月11日～9月30日

〈会 場〉 文学館常設展示場

未明童話の代表作の一つ「野ばら」は、大正9年4月『大正日日新聞』に発表されてから、令和2年で100年を迎えました。老兵士と青年兵士の静かで温かい交流を描き、反戦的なテーマを持ったこの童話は、どのような状況の中で書かれたのでしょうか。

大正9年は、前年に第一次世界大戦が終結し、日本では戦後恐慌が起こった年です。戦時中の好景気から一転、株価暴落や銀行取り付け騒ぎなどが各地で勃発し、失業者が街にあふれました。その様子や、世界で1600万人とも言われる死者を出した大戦の惨状を報道で見た未明は、平和への思いを強くしたでしょう。

また、大正7年から世界中で流行が続いていた流行性感冒（スペイン風邪）が日本を襲い、多くの患者と死者を出していました。未明一家も4人全員が感染し、未明は罹患後も病をおして原稿を書き続けたため、1月中旬から下旬にかけて、一時は危篤状態に陥りました。死の淵に立った未明は、改めて命の大切さを心に刻みしました。

この時期に未明が強く感じた「平和」と「命の大切さ」への思いが、「野ばら」



「野ばら―小川未明童話集―」
童心社 昭和57年12月



展示の様子

という童話になって表れたのではないのでしょうか。
この作品は大正・昭和・平成と多くの童話集に収められ、さまざまな画家の手によって描かれてきました。また映像化や音声化もされ、後世に伝えたい作品として愛されています。
本展では、「野ばら」が収められた童話集や紙芝居、アニメーションの写真などを展示しました。

特集展示3

〈100年前の童話雑誌と未明〉

〔会 期〕 10月2日、12月23日

〔会 場〕 文学館常設展示場

大正7年7月、子どもたちのために「芸術として真価のある純麗な童話と童謡を創作する」ことを目指し、童話雑誌『赤い鳥』が創刊されました。これに賛同した多くの著名な作家が『赤い鳥』に作品を発表し、最盛期には3万部もの発行部数を誇りました。

『赤い鳥』の成功によって生まれた童話・童謡流行の波にのって、大正期には『おとぎの世界』、『金の船』（のち『金の星』）、『童話』などの創刊が続ぎ、日本の童話雑誌は黄金時代を迎えました。

本展では、約100年前、これらの童話雑誌と未明がどのようにかわり、未明はどんな作品を発表したのか紹介しました。

●未明と『赤い鳥』

鈴木三重吉が主宰した『赤い鳥』の創刊には、未明がかかわっていました。未明とある会話が、三重吉が『赤い鳥』を創刊したきっかけの一つだというふう

に、のちに未明は語っています。また、三重吉から誌名の相談を受け、『赤い鳥』はどうかと提案した話は有名です。

「鳥」など数々の名作が生まれました。未明ものちに代表作といわれる「月夜と眼鏡」「金魚売」などの童話42編、童謡2編を発表しています。



『赤い鳥』5巻5号
赤い鳥社 大正9年11月

●未明と『おとぎの世界』

創刊号から6号（大正8年9月号）まで、未明が監修（顧問）を務めました。表紙の上部には「小川未明監修」と明記されています。

出版元の文光堂は、新潟県出身の野口安治が創設し、文芸雑誌『秀才文壇』を発行していました。未明は『秀才文壇』で一時期働いていたことがあり、同じ越後人という縁もあって、監修を任されることになったようです。創刊当初は応募童話や童謡の選定も引き受けていました。

未明は代表作の一つである「牛女」をはじめ、童話7編と童謡7編の合計14編を発表しました。監修を務めた創刊号から6号までは毎号に童話・童謡各1編を発表、巻頭・巻末には常に未明の童話・童謡が掲載されました。

『おとぎの世界』は、終刊までの3年間に全44冊が刊行されました。



『おとぎの世界』1巻1号
文光堂 大正8年4月

●未明と『童話』

未明が初めて『童話』に作品を発表したのは、創刊から半年後の大正9年10月号のことです。それ以降、未明の創作童話は隔号か2号おきに『童話』の巻頭を飾りました。

未明は創作童話30編と随筆2編の合計32編を発表しましたが、その中には今日まで親しまれている「角笛吹く子」「港に着いた黒んぼの話」「沙漠の町とサフラン酒」「雪来る前の高原の話」などの代表作が多く含まれています。創作童話の発表数30編は、『童話』に掲載された作家の中で2番目に多い数です。『童話』は小学校高学年向けの雑誌だったので、未明童話の中では比較的長い作品が多いようです。



『童話』1巻7号
コドモ社 大正9年10月

『童話』は、終刊までの6年間に全75冊が刊行されました。

●未明と『お話の木』

他誌から少し時代は下りますが、未明と童話雑誌の関係を語る際に欠かせないのが、未明が主宰を務めた『お話の木』です。

昭和11年、これまでご紹介した童話雑誌がすべて終刊となり、小さな子ども向けの『コドモノクニ』等の絵雑誌や個人雑誌のほかには、童話作家の作品発表の場はほとんど失われていました。このようなか中で『お話の木』は誕生し、未明は創刊号に「『お話の木』を主宰するに当たりて宣言す」を発表します。そこには芸術としての童話の使命が書かれ、子どもたちに対する真の愛情が見て取れます。しかし創刊から2か月後に日中戦争が始まり、戦時統制経済下、採算が取れなくなった『お話の木』は、創刊から1年余りで、全9冊をもって終刊しました。



『お話の木』1巻1号
子供研究社 昭和12年5月

特集展示4

〈小川未明と坪田譲治〉

〈会 期〉 12月25日、

2021年4月7日

〈会 場〉 文学館常設展示場

小川未明、浜田広介とともに「児童文学界の三種の神器」と評された坪田譲治は、未明の愛弟子と言える存在でした。はじめは未明が坪田に指導をする関係でしたが、坪田の作家としての成長とともに、坪田が雑誌で未明の童話の批評をしたり、未明童話集の編集や解説を手掛けたりするようになります。

関東大震災直後、社会主義的思想を持つことで身の危険を感じた未明は、一家で坪田の家に数日滞在しました。また、坪田が未明文学賞の選考委員や未明会の代表を務めるなど、未明が坪田を頼りにすることも多くありました。

8つの歳の差のある二人ですが、互いを思いあい、頻繁に手紙のやり取りをしていたことが、坪田譲治の研究者によりわかってきています。

●二人の出会い

坪田譲治は、『坪田譲治全集』第5巻(昭和29年新潮社)のあとがきで、未明と初めて会った日のことを書いています。明治41年5月、同級生の生田蝶介の紹介で、坪田は早稲田南町の未明の自宅を訪ねました。4月に早稲田大学文科予科に入学したばかりの坪田は18歳、前年に長女晴

代が誕生した未明は26歳でした。

「先生は作品を持って行くと、いつでも、ニコニコして、「読んで見給え。」と言われるのが、ならわしでした。そしてどんな拙い作品でも、親切丁寧マジメに批評されました。」

坪田は未明が作った創作合評会「青鳥会」に参加し創作を続けますが、徴兵や病氣、故郷での就職など苦勞を重ね、ようやく作品が認められるようになったのは昭和10年頃のことでした。未明もさぞ喜んだことでしょう。未明が坪田の大学入学の際の保証人になったり、坪田が未明の長男哲文の死に立ち会ったりと、支えあって歩んだ30年でした。

●二人の交流

未明が坪田に宛てた手紙が、吉備路文学館(岡山県)に18点所蔵されています。令和元年に坪田譲治研究者の山根知子氏(ノートルダム清心女子大学教授)が発表した論文「未発表資料 小川未明・坪田譲治書簡」によると、明治43年〜昭和29年の間に書かれたもので、ここからは未明から坪田への、信頼と期待の思いや深い愛情を読み取ることができます。

一方、坪田から未明に宛てた手紙は、印刷の年賀状を除くと、戦後に書かれた2点と弔詞のみを当館が小川家からお預かりしています。いずれも未明への変わらぬ尊敬を感じ取れる内容です。

昭和36年に未明が亡くなるまで、二人の交流は50年余り続きました。その後も

坪田は、随筆に未明との思い出を綴ったり、上越を訪れて未明ゆかりの地を巡ったりと、未明を偲びました。また、小川未明生誕の地碑の題字揮毫を行い除幕式にも参列するなど、未明顕彰にも貢献し、師への感謝の念を持ち続けました。

本展では、坪田から未明への書簡や写真などを展示し、二人の交友を紹介しました。



小川未明と坪田譲治 (昭和24年2月)



小川未明生誕の地碑 (上越市幸町)
昭和50年4月建立



坪田譲治の弔詞
昭和36年5月

文学館講座 (講座要旨)

第1回

小川未明のスペイン風邪の

体験と感染症小説

講師 小笠裕二氏 (上越教育大学副学

長・小川未明文学館専門指導員)

日にち 10月31日

会場 高田城址公園オーレンプラザ

研修室

参加者 26人



■はじめに

今から百年前の大正9年、小川未明はスペイン風邪にかかりました。また、未明は2人の子供を感染症で亡くしています。新型コロナウイルス感染症という未曾有の事態のなかで、未明が描いた「感染症小説」と呼べる作品が、今の私たちの教訓にならないか考えてみたいと思います。

■危機の時代に読む小川未明

未明は2人の子供を大正3年と7年に

疫病と結核で亡くしています。また自身も新型コロナウイルス感染症と比較されることの多いスペイン風邪にかかり、重症に陥っています。

未明が描く童話・小説にはコレラや赤痢(疫病)、ペストや結核、しようこう熱などが登場します。子供の死を描いた未明の作品は哀切で読者の胸を打つと同時に、百年前の感染症が今より身近で危険が偏在していたことをうかがわせます。

2人の子供を亡くした後書かれた「金の輪」(大正8年)は、長い間病気で寝ていた太郎が外へ出られるようになり、金の輪を回す不思議な少年に出会う話です。太郎はそのことを母親に話しますが信じてもらえません。その後、太郎は熱を出し、亡くなってしまいます。母親の無理解を描くことを通して、子供に寄りそってやれなかった親としての未明の悲しみを刻印させた童話です。

スペイン風邪にかかり重症に陥った後に書かれた「野薔薇」(大正9年4月)は、国境の石碑を守る、隣り合う2国の兵士の間で芽生えた絆が戦争によって断たれる話です。野薔薇が咲き自然豊かな国境の地で、2人は敵味方を離れ心を通わせますが、戦争が起こり青年兵は戦地へ赴き戦死します。青年を案じる老人兵の思いは届きませんでした。

第一次世界大戦やスペイン風邪による多くの死が、寄りそっても失われる命があることを未明に教えたのでしょうか。自

身も患者となり生還したスペイン風邪の経験は、子供の死にこだわり続けた未明の目を世間に向けさせ、広く生と死の双方を見るようにさせました。未明の死生観に変化を生じさせた経験だったのです。

物語の最後、国境に残された老人兵は帰郷します。この「帰郷」は、青年兵と心を通わせた「国境のない自然」へ帰ることを暗示しています。未明が信奉したアナキズムは、社会契約された国家の形態を望ましくないと考え、自然状態に戻そうとしました。

文学は、人の生き方や心の問題を扱います。コロナ禍により人類は世界共通の危機を体験しました。国と国の利益関係より、人と人の心の関係を重視する未明の文学には、国境を超えて助け合わねばならなくなった危機の時代を生きるヒントがあります。

■未明の〈感染症小説〉

未明の小説を読んだとき、一番胸を打たれるのが2人の愛児を亡くした小説群です。「未知の国へ」や「悩ましき外景」が子供の死を描いた絶唱ですが、他の未明作品を含め、「感染症小説」の視点で捉えると見え方が違ってきます。

① 感染症は大きな拡がりをもつ

多種多様な感染症があり、人々は感染症の危機の中で暮らしていました。子供が亡くなる深い悲しみの物語が、



講師の小笠裕二氏

当時の日本社会においても日々展開していたことが分かります。またその視点をヒントに未明の小説を読み直すことも可能になってきます。

② 対応の仕方、人のふるまい方

明治の人々は、玄関にまじないの紙を貼るぐらいしか感染症に対応できませんでした。未明は、まじないに頼ってはいけないと考え直した青年は助かるが、まじないの紙を家にぶら下げている村は死滅したという小説「こんな村もあつた」(「科学」大正13年11月)を書いています。感染症にどう対応すべきか、未明の〈感染症小説〉を読むとそのヒントがつかめます。

③ 横のつながり

スペイン風邪には、志賀直哉や斎藤

茂吉、内田百閒、永井荷風、島村抱月等もかかりました。(島村抱月はスペイン風邪で命を落としました。)同じ病気に対し、他の作家がどんな対応をしたのか、どのような作品を残したのか比較することができます。

④歴史への注目

上越市高田における過去の感染症の流行に目を向けることも必要です。コレラや腸チフス、赤痢が流行した上越市の歴史は『上越市史』などに詳しく書かれています。スペイン風邪では150人近い死者が出ています。

⑤危機の時代を生きる現代への教訓

コロナ危機では、医療現場と政治が大きな力を発揮しましたが、歴史の教訓も役に立ちます。スペイン風邪の教訓を今の私たちの暮らしに活かす必要があるでしょう。

■未明文学へのスペイン風邪の影響

大正時代に流行したスペイン風邪は世界中に拡散し、日本でも推定45万人の命が失われました。当時39歳の未明も大正9年1月、第3波に感染し、新聞の見出しに「小川未明氏重態」「夫人も危篤」「一家惨たり」と書かれました。

感想「死の凝視によつて私の生は跳躍す」(大正11年)には、こうあります。「私はかつて死にかかったことがある。子供の死を見つめたこともある。その時から、死を今までのように恐れなくなった。厭

世思想から遠ざかった。今まで忘れていた生を考えるようになった。私は生の真実に触れたいと焦燥する。自分の生がどんなに短いものであっても、ほんとうに、真実な生活をこの地上で営みたい。ほんとうの人間の生活を打ちたてるために働いたという満足を抱いて生を閉じたい。」未明はこんなことを思いながら力の限りを尽くし、仕事を意義あるものにしたいと考えました。社会を変えるための様々な運動に参加し、童話を書き、小説を書きました。未明の活動の源には、感染症の経験もあったと思われる。未明の「感染症小説」を通じて、次の世代へバトンを渡すための手がかりが得られればよいと思います。



第1回文学館講座

第2回

未明童話アニメーションの魅力

講師 森下成一氏(有限会社スタジオトウインクル代表取締役)

聞き手 小埜裕二氏(上越教育大学副学

長・小川未明文学館専門指導員)

日にち 11月23日

会場 高田城址公園オーレンプラザ

研修室

参加者 28人



特別展「画家・古志野実が描いた未明童話」で展示している絵を使って未明童話のアニメーションを制作した、アニメーション撮影会社の代表・森下さんに、未明童話をアニメーションにした際に工夫した点や未明童話の魅力について、小埜さんとの対談形式でお話いただきました。

森下さんは昭和46年からアニメーション制作に撮影セクションで携わり、昭和48年にスタジオコスモスの設立に参加。昭和57年にスタジオトウインクルを設立し、NHK教育テレビジョン(Eテレ)で放送中の「おしりたんてい」はなかつぱ」など、子どもたちに人気の番組を撮

影しています。

森下さんのこれまでの仕事や、制作された未明童話のアニメーションについて伺いました。

■アニメーションの世界

小埜 今まで手掛けられた中で、思い出に残っている作品は何ですか。

森下 スタジオコスモス時代だと、カメラマンとして参加した「銀河鉄道999」。当時としてはかなり特殊な撮影で、徹夜して撮ったり、大変でした。

小埜 今はアニメーションもデジタルの時代ですね。2000年頃からの、フィルム作品からデジタル作品への過渡期のご苦労はありましたか。

森下 デジタル化の波に乗り遅れることに対する不安はありました。しかし、コンピュータではできないくらい良い作品を作るため、設備投資をしてアナログの撮影機械を開発しました。

小埜 アナログならではの技術を投入したんですね。お持ちいただいた、フィルム作品の撮影風景を見ましましょう。

森下 今はコンピュータ1台あれば、1人でアニメーションを作れる時代。当時はセル画を1枚ずつ、ほこりを取りながらシャッターを押す。二人一組で仕事をしていました。描かれている背景を画びょうで留めて、セルを重ねて、汚れがあれば掃除して。1枚ずつ手間をかけて撮影していました。デジタルなら10分の

1くらいスピードできてしまっています。これは、会社が完全にデジタル化してから7年後に、依頼があってアナログ撮影をした時の記録映像です。久々にカメラを回しました。物珍しさに、撮影業界の人たちがぞって見学にきました。

デジタル化にも良い面はあります。間違いがあったら頭からすべて撮り直したったフィルム作品と違い、そこだけ直すことができます。



講師の森下成一氏

■未明童話のアニメーション

森下 制作した未明童話のアニメーション3編は、デジタル作品です。古志野さんの手描きの絵を、デジタルで出力しました。

小埜 最初に制作されたのは「月とあざらし」ですが、どうしてこの作品を選ば

れたのでしょうか。

森下 「月が移動する」というところにファンタジーを感じました。映像化したら楽しんでもらえるのではないかと思い、絵を古志野さんに依頼しました。

日常のテレビアニメの制作は、スケジュール優先です。妥協をしなければならぬこともある。未明の作品は制作の時間を十分にとって、芸術性の高い作品を目指しました。仕上がるまでに1年くらいかかっています。「銀河鉄道999」で知り合った、メーテル役の声優・池田昌子さんに朗読を依頼しました。

小埜 古志野さんは、どんな方でしたか。
森下 おもしろい人でした。彼からはいろいろな刺激を受けました。私にとって、唯一無二の存在だったと言えます。本当に、いい出会いだったと思います。

小埜 未明童話のアニメーションを作る上で、最強のタッグでしたね。古志野さんは、アニメーションのために大量の絵を描かれましたが、制作はどのような順序で行われましたか。

森下 古志野さんが未明の童話を読んだイメージが、そのまま絵になっている。童話の1秒1秒を絵にしていたのだらうなど感じました。似たような絵が何枚もあり、かなりの枚数になりました。その絵を童話のとりの順番にして、アニメーションを作りました。「月とあざらし」は、池田昌子さんの抒情的な語りカメラワークで光を加えたりして、語り

と映像のいい要素を活かせるように工夫しました。

小埜 「殿さまの茶わん」のアニメーションは平成28年の発表ですが、平成26年に古志野さんは完成を見ずに亡くなっています。

森下 古志野さんとのタッグも3作目だったので、登場人物にもっと動きを出していけたらいいと話していました。アトリエにこもって、殿さまや役人達の性格まで踏まえた顔立ちを考え、ずいぶんたくさんの絵を描いてくれました。

ご病気のこととは知らされていましたが、亡くなったショックが大きく、こちらが立ち直るのに1年くらいかかってしまいました。古志野さんの絵を元にキャラクターを作りこみ、最後はCGの力を借りました。

小埜 古志野さんとの、次の制作予定はあったのでしょうか。

森下 未明の童話に気に入っていたので、次は「飴チョコの天使」にしようかと話していました。魅力的な絵を描く人だったので、私は彼が飴チョコのパッケージにどんなかわいいた使の絵を描いてくれるか、楽しみにしていました。

小埜 スタジオトウインクルの新作で、来年発表予定のアニメーション「眠い町」の制作についてお聞かせください。

森下 先の3作品と違い、絵本のために堀越千秋さんが描かれた絵を使って制作しました。小川英晴さんからお話をいた

だいて、強いインパクトのある作品でも好きだったので、絵本から抽出して動かしした画像を堀越さんにお見せしたら、おもしろがってください。絵本はページ数が決まっていますから、映像化するには絵が足りません。アニメーション用に、絵を描き足してもらいました。

小埜 本日のお話で、改めて未明を別の側面から考えることができました。これからも未明童話のアニメーションを見せたいだけのことを期待しています。



第2回文学館講座

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、1991年（平成3）に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

2020年度で第29回目を迎え、これまでに延べ14000編を超える作品が国内外から寄せられました。大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



第29回 小川未明文学賞贈呈式（2021年3月27日 小川未明文学館）

第29回小川未明文学賞大賞受賞

かみや としこさん

（大賞作品「屋根に上る」）



受章のひとこと

このたびは名誉ある賞をいただき有難うございました。

私ごとですが、幼くて親の存在がかなり大きかった時期から、次第に外の世界に足を踏み込み始める頃、大人からみれば些細なことでも本人にとっては負担だったり不安だったり大変だった気がします。そんな時よく屋根に上りました。寝そべるとぬくぬくと心地よく幸せだなあと思ったものです。そのくせもし私がいることを知らずにはしごをはずされたらどうしようかと心配になりました。

そんな思い出を書いて見ようと思っていた頃、お隣の新築工事が始まりました。高山から泊まりで大工さんをお呼んでの大掛かりなものでした。見事な仕事ぶりに大工さんを登場させたくなりました。

書き進めるにあたって、注意したのは頭ではなく心で書くこと。小川未明文学賞第25回と優秀賞を頂きました。大賞をのがしたのは、頭で書いたからだと思っただけです。書き終って心で書いたと思いましたが反面地味で今風ではないような気もして、まさか大賞を頂けるとは夢にも思っていませんでした。受賞の連絡を頂いた時、何十年かぶりに心臓がバクバクいたしました。今も嬉しくて毎日がふわふわしております。

あらためて選出頂けたことに、ただただ感謝です。

第30回作品募集

◆募集作品

- ①短編部門（小学校低学年向け）
 - ∴ 400字詰め原稿用紙20枚〜30枚
- ②長編部門（小学校中学年以上向け）
 - ∴ 400字詰め原稿用紙60枚〜120枚
- ・いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表のオリジナル作品。各部門同時応募も可。
- ・パソコン等の場合はA4用紙を使用。
- ・表紙に題名、筆名、本名（ふりがな明記）、年齢、職業、性別、〒住所、電話番号、400字詰め換算枚数を明記。
- ・原稿用紙2枚程度のあらずじを表紙の下に綴じる。

◆応募資格

不問（ただし、当文学賞の過去の大賞受賞者は除く）

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆締切

2021年10月31日（日）（消印有効）

◆入選作

・大賞（賞金100万円・記念品）

・優秀賞（賞金20万円）

◆発表

2022年3月上旬（予定）

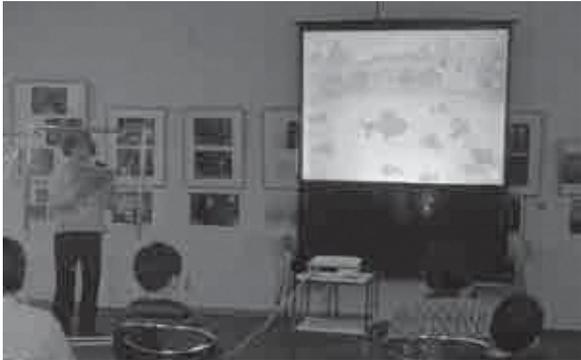
*詳細は小川未明文学館ホームページをご覧ください。ただ、左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2
上越市文化振興課
「小川未明文学賞係」
TEL 025-526-6900
FAX 025-526-6904
E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

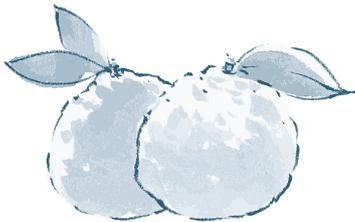
特別展おはなし会

10月25日(日)



お話の会うさぎ 「赤い魚と子供」

母に叱られながらも赤い魚を捕まえたいと毎日川へ……やっと捕まえて見せると母から思いがけない言葉が。
子どもの心の成長を感じさせるお話です。



作品名	担当グループ
①「山の上の木と雲の話」	グループさくら
②「赤い魚と子供」	お話の会うさぎ
③「高い木とカラス」	シャーフの会
④「幸福のはさみ」	グループ空
⑤「ゆずの話」	未明童話の会



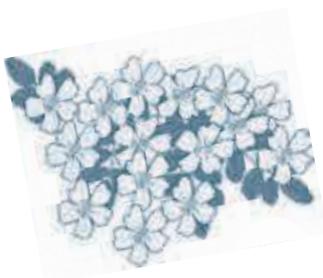
未明童話の会 「ゆずの話」

年雄はゆずを見ると悲しくなる。子供の頃、父が大事にしているゆずの実をもいだ年雄をかばって、父に叱られた兄。その兄は亡くなった。後になってそれを聞かされた父は後悔した。
子ども達も真剣に聞いてくれました。

研修会

オーレンプラザ
11月17日(火)

令和2年度の会員研修会は、「未明ボランティアネットワークの始まりについて」と題して、高波昭子名誉会長の講演会を実施しました。改めて未明ボランティアネットワークの発足の経緯や、当時の会員の思いである「未明の人柄や業績を広く世に紹介するとともに、これからを担う子ども達の心の夢を育む」を実感することができました。
また、文学館学芸員から、未明ゆかりの地の場所や、現在の様子を聞きました。



出張おはなし会、
会員加入の連絡先

上越市文化振興課

〒943-0832 上越市本町3-3-2
TEL 025-526-6903
FAX 025-526-6904
E-mail:mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

vol.17

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2021年5月31日

未明ボランティアネットワークだより

2020年度
の活動

- ・小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会……全17回、延べ参加者184人
- ・出張おはなし会（市内小学校）……………8か所、405人
- ・特別展おはなし会（小川未明文学館ギャラリー）……33人
- ・会員の研修会（オーレンプラザ）……………25人

文学館おはなし会（毎月第2、第4日曜に実施）



シャープの会

手作り楽器ライアーのやさしい音色にのせて「月とあざらし」、ペープサートによる「雪だるま」、大型絵本「ねずみのさかなつり」を朗読しました。大雪の中の晴天で多くの方が聞きに来てくれました。



グループ空

パネルシアターで「きょうだいのねずみ」を楽しんでもらいました。子ねずみがたくさん登場するので子どもは興味を持って聞いてくれ、とても喜んでくれました。

出張おはなし会



お話の会うさぎ【大島小学校】

感染対策をしっかりやってのおはなし会です。子ども達に小川未明のことを話し、作品を聞いてもらえたことは、喜びでした。送られてきた感想文では、子ども達の感性に感動を覚えました。

グループさくら【和田小学校】

体育館で「殿さまの茶わん」「月夜とめがね」「山の上の木と雲の話」のお話を聞いてもらいました。心暖まる感想をいただきました。



● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集を行っています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合(すでに複数点を所蔵している資料等)を除きお受けしますので、ご不明の点はお問い合わせいただくと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料(短冊・書軸等)、写真(オリジナル)、小川未明関係者資料(未明書簡、献本など)

2. 図書

未明作品集(未明生前・没後刊行図書)、全集・選集(未明作品を一部所収した資料も含む)、初出雑誌(未明作品掲載)、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事(雑誌・新聞等)

令和3年度 小川未明文学館カレンダー

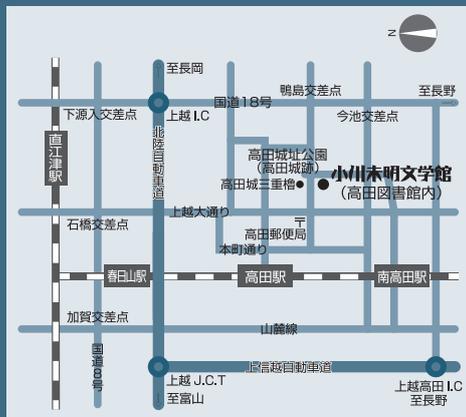
- 5月8日 小川未明文学館 こども祭
- 6～9月 朗読研修会
6月26日(土)・7月3日(土)・7月17日(土)
- 童話創作講座
7月10日(土)・9月4日(土)・9月11日(土)
- 10月 特別展
「超大型紙芝居『月夜とめがね』原画展(仮)」
会期：10月9日(土)～12月5日(日)
- 第30回小川未明文学賞募集締切
10月31日(日)
- 10～11月 文学館講座(全3回)
- 3月 第30回小川未明文学賞贈呈式(東京都)

*所蔵品を紹介する特集展示を通年で行っていきます

未明ボランティアネットワークによるおはなし会
*毎月第2・4日曜日の午後2時から文学館で実施
*学校等での出張おはなし会を随時実施

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、延期または中止する場合があります。

◆問合せ
〒943-0835
新潟県上越市本城町8-30(高田図書館内)
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL <https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mineibungakukan/>



◆入館料 無料

◆休館日
毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)・
祝日の翌日・館内整理日(毎月第3木曜日)・
資料整理期間・年末年始(12/29～1/3)

◆開館時間
火～金曜日 午前10時から午後7時
(6～9月は午後8時まで)
土・日曜日、祝日 午前10時から午後6時

小川未明文学館 利用案内